シリーズ

スーパー読者の経営力が選ぶ あの商品この技術 14

近藤牧雄氏は、近い将来、水耕栽培一本に絞り、麦、コメから手を引く考えだ。その幕引きに選んだのが乾田直播。〝背を向けた〟と自身の経営を評するが、近藤氏の機械、資材選びには、過去の取り組みを通して培った経験に基づく意味がそれぞれに含まれている。



愛知県安城市

近藤牧雄 氏

【経営データ】
■年間売上：2200万円
■経営面積：コメ（コシヒカリ・あいちのかおり）-8ha（乾田直播）、
麦（農林61号・イワイのダイチ）-6ha、
ミツバ（先覚）-26a（水耕栽培）
■労働構成：本人、妻、パート6名
■売 り 先：コメ・麦・ミツバともに農協に全量出荷

※■の数字は資料請求番号です



61 不耕起V溝直播機
（鋤柄農機㈱「AD-101」）
1～2月に代かきし、乾田状態でV字に掘った溝に筋播きする不耕起V溝直播栽培は、現在、愛知県で1050haほど普及している。近藤氏は、妻が体が弱く育苗作業に加われないこと、友人山口研氏（写真下）が積極的に同栽培に取り組むのを間近で見たことで、すべての田を直播に切り替えることにした。作業は同機を使う近隣の営農組織に委託。V字溝は土中に亀裂を入れ発芽に必要な酸素供給には有利だが、最後尾に付く分銅による覆土は構造上浅く、保湿に難があると山口氏。現在、山口氏はレーザーレベラで圃場を均平にすることで代かきを省く“不練り”に取り組んでいる。



62 写真奥：除草剤（三共アグロ㈱「三共の草枯らし 20ℓ」）
63 写真手前：除草剤（日産化学工業㈱「クリンチャーバスEM液剤 500㎖」）

播種後すぐに乗用管理機型ブームスプレーヤで写真奥の「三共の草枯らし」を、ついで約3週間後の入水直前、写真手前の「クリンチャーバスEM」を散布する。「このふたつでほとんど大丈夫だが、それでもだめな時は入水後にもう一回『マメットSM粒剤』を使う」と近藤氏。ブームスプレーヤのノズルは、ノンドリフトのフォームノズルを使う。



安城市で積極的に乾田直播に取り組んだ先駆者、山口研氏

近藤牧雄氏は、60歳になったら機械に乗る仕事はやめようと常々考えていた。そして、余生は水耕栽培の管理だけで自適に暮らそうと。

今年その60歳を迎える。しかし、田畑との付き合いはまだ続きそうだ。

「今、大学に通っている娘を卒業させ無事に嫁がせるまでは、コメも麦も続ける。まだ稼ぐ必要がある」

近藤氏はこれまで、農業を人生の30％にとどめ、趣味や家族のために使う残り70％を充実させる糧を得る手段として位置付けてきた。

しかし、生来の好奇心旺盛な性分から、その割合は時に大きく変動する。自身を興味の赴くまま飛びつく〝アマガエル〟と呼び、これまで先進的な取り組みを数々行ってきた。

まだ有効な除草剤も均平機械もないころに乾田直播に挑戦した。航空防除全盛の時代、ラジコンヘリの免許を取りヘリ防除の有効性を訴えた。また、現在スガノ農機㈱主催で開催される「有機物循環農法研究会」の立ち上げに奔走したりもした。

その近藤氏が今、真剣に農業経営

取り付ける作業機はブームスプレーヤと溝切り機。溝切りはコンバイン作業を円滑に行うための中干しのためで、溝を掘り排水を促進させる。同機の保管は、タイヤへの負荷を考慮して、ジャッキアップしておく。座席下には色付きの新聞折込チラシを挟んであるが、これは作業時のマーカーとして使う。近藤氏は「紙なので使ったらそのままにできる。これもりっぱな資材」と話す。

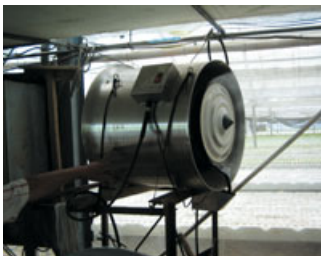


乗用管理機
（井関農機㈱「愛さいか17」）



㊐殺菌剤
（三共アグロ㈱
「チウラム80」）
種モミの消毒は、写真右の自作撹拌機でする。田植えから直播に切り替える際、追加で入れた薬剤は写真左の「チウラム80（粉剤）」。割合は種もみ20kgに対し、水800㎖、「テグリード」80㎖、「スミチオン」6㎖、「チウラム」が100g。「あまり早く回すと上ブタに中身が寄るため、取り付けるモータのスピードに気を付けた」と近藤氏。

細霧冷房機（フルタ電機㈱「AC6040S」）



水を細霧にして送風することで、ハウス内の室温を下げる。夏季ハウス内の温度が上昇し、ミツバや現在試験中のサンチュの発芽率が著しく低下したため同機を導入した。1台15万円ほどするため、8棟あるハウスすべてをカバーするには16台が必要で、最低限の育苗スペースのみに設置している。日の当たる入口付近には、冷却とダニ防止のため、塩ビパイプにノズルを取り付けた簡易細霧冷房設備を自前で設置している。

ミツバの種子消毒



近藤氏は、セメント用のハンドミキサを使ってミツバのロウ質にキズ（発芽を促進）を入れた後、5℃の予冷庫で1カ月程度、乾燥・冷却させることで消毒する。できるだけ農薬の使用を制限するための工夫。こうすると「菌が死滅し、定植後病気が出ない」。

改造ハローシーダ（松山㈱「HR200B」）



麦用に使う搭載型施肥・播種機に動噴を取り付け、写真左下にあるように鎮圧ローラ上部に取り付けたブームから除草剤を同時散布する。仕組みはPTOジョイントにギアを取り付け、チェーンで動噴のシリンダを回しブームに薬液を送る。PTO回転と動噴のマッチングによる散布ムラも、「撒けさえすれば」問題ないとのこと。



直播した田から望む連棟ハウス
稲刈り前の中干しまで水を切らない田では、用水から侵入したフナが25cmを超えるまで成長することもあるという。奥に見えるのは、近藤氏が「死ぬまで夢を追う」ために建てた水耕栽培用連棟ハウス。

㊐液状複合肥料
（㈱ファイトクローム「エレマックス 0-28-26」）
同じくピシウム苗対策に導入した耐病効果がある液肥。水温が29℃を超えると急激に被害が増え悩んでいたところ、農薬メーカーから勧められた。リン酸ではなく、リンの成分量・作物吸収性が高い亜リン酸を主成分とし、病害への抵抗性機構の発現を促進する。肥料登録品で使用作物を選ばないため、登録農薬の少ないマイナークロップ生産者には「貴重な資材」と近藤氏は話す。



㊐金属銀剤（㈱サトウセン「オクトクロス」）
銀の微細な粒子をナイロン繊維上に均一にメッキした、水耕栽培用殺菌剤。細菌類、かび類に有効。微量の銀イオンが溶液中に溶出し、銀や酸化銀、塩化銀の間で反応が起こり、OHラジカルが形成されることにより作物の根に菌を寄せ付けない。培養液タンクに漬けておくだけの手軽さに加え、以前は登録農薬の少なさからEC濃度を上げることでしかピシウム苗による根腐病を抑制できなかったが、現在は「同剤のおかげでその心配をほとんどしなくてもよい」という。



の幕引きを考えている。その引導として選んだのは、かつて挑戦した乾田直播だ。現在、愛知県では鋤柄農機㈱の不耕起V溝直播機を使った直播栽培が広範囲に普及しているが、近藤氏は近隣の営農組合へ作業委託し、すべての田に直播を取り入れた。

「自分はすでに一線を退き、背中を見せている。この技術がすごいからやるというのではない」

こうは言うものの、妻が病気で倒れ苗作りを手伝えなくなったこと、それでもコメを続けなければならない現状から選んだ同技術は、省力と低コストが命題となっている日本のコメ生産に、ひとつの答えを提起する。

加えて、近藤氏が同栽培を取り入れたのは、安城市高棚営農組合の友人、山口研氏に自身の若き日を重ねたからでもある。

「楽できるやり方を探すのは当たり前」と言う山口氏は、同僚からの反対を押し切り直播を始め成功させた。現在は、不耕起V溝直播栽培の要、冬季代かきをレーザーレベラによる均平に変え〝不練り〟の直播に挑戦している。

「一業種一世代」を標榜し、自分の代で幕を閉じようとする近藤氏だが、農業経営にとって大切な〝なにか〟を引き継ぐ相手はすでに見つけている。

（野村大樹）